

3. 石人^{せきじん}

位置（第43図）

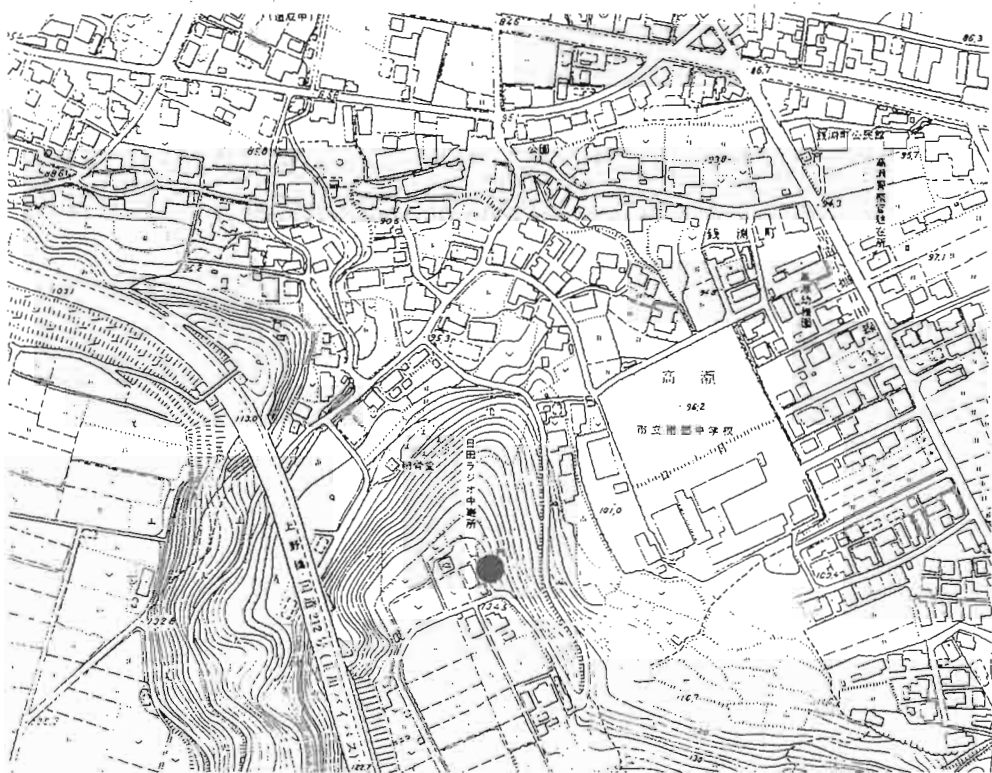
石人は日田市銭湊町 1997番地の陣ヶ原と呼ばれる台地に南端に安置されている。石人は2体存在し向かって左側が扁平石人、右側が甲冑を模した円体石人である。2体の石人は大分県指定有形文化財に指定され、お宮の東隣に覆い屋がかけられ保護されている。

現状（図版14参照）

現在、扁平石人は4つの石で構成されており、上から一段目が顔から胴部かかる本体、次に脚部、さらに銘文の記された台座とこれらを支える自然石の台座からなる。先の天保年間に移されたとされる石人は一段目のもので、他の台座などは後補である。

石人は扁平な奴舁形をなし、高さ47cm、幅68cm、厚さ15cm前後で阿蘇溶結凝灰岩を使用している。正面には人物の顔が印刻されていて、径約19cmの円の輪郭の中に目と口が掘りこまれている。

また、裏面には靫を表現した高さ13cmの矢が2cm間隔に6本みられ、全体に赤色顔料が



第43図 石人位置図(1/5,000)

塗布されている。両面ともに風化による剥落が著しい。

歴史的経過

この石人は、扁平石人の台座にその由来が江戸時代の儒学者広瀬淡窓の撰、広瀬健の書によって記されている。それを簡単に要約すると江戸時代の安政年間（1854～1860年）に久留米藩主である有馬侯が、古代の豪族筑紫君磐井の墓に祀られていたと思われる石人1体を発見した。この石人を後に豊前の僧雲華院大含に贈り、土台に大含は日田の隈に住む山田元輔にこれを鏡坂に安置したとある。それが戦後になって現在の場所に移された。

以下銘文を示す。

扁平石人の台座に記されている銘文は次のとおりである。

（安政丙辰銘文）

石人磐井故物半隠	山田翁得之僧雲華	建鏡阪側	百夫興致此高原道是
磐侯故物存烟樹新隣	行幸路雲華曾入座禪	門滄桑幾変人無恙寵	尋多端石不言非為詩
翁能好古千年誰掃	苔痕	安政丙辰 廣瀬健	範書

次に台座の左から記されている銘文は次のとおりである。

（嘉永七年銘文）

石人銘	筑後上妻縣南二里有	石人数十慶長中田中	氏采以築城無復遺者
天保中米府大夫有馬	氏好古偏搜南山於榛	莽中獲一後貽豊前僧	大含大含携入京師觀
者莫不奇重既而又貽	我縣山田元輔元輔弟	可祐導余及僧五岳往	觀長一尺五寸有奇重
一百六斤方顛短軀背	負六箭如武夫急装而	座者狀形貌怪異刻彫	粗拙其為古物無疑按
筑後風土記石人筑紫	豪族磐井氏所造蓋當	繼體天皇時距今一千	三百餘年矣完物之存
莫古於此夫古昔稱豪	族者何限 湮滅無聞	獨筑人知有磐井氏以	石人存也則又莫珍於
此山田氏我縣豪右兄	弟嗜古書画陶冶雜然	滿室而今後保千年者	其能幾哉最奇重之有
以也可祐造石片木請余	銘之銘曰	南山崔々誰使 獨淮	水湯々我將 浴神如有
形乃不足善哉古	人愛此素朴	嘉永七年歲次甲寅冬	十二月廣瀬範撰

石人2体正面写真



扁平石人上部
正面写真



扁平石人上部
裏面写真

